

2009年4月1日付新入社員の入社式について

1. 新日鉱グループの中核事業会社である株式会社ジャパンエナジー(本社:東京都港区虎ノ門二丁目、社長:松下功夫)および日鉱金属株式会社(本社:東京都港区虎ノ門二丁目、社長:岡田昌徳)は、4月1日、次のとおり新入社員を迎えました。

		ジャパンエナジー	日鉱金属
大学院・大学卒社員		37(29)	42(35)
(内訳)	事務系	24(17)	12(12)
	技術系	13(12)	30(23)
工専卒社員		5(3)	0(2)
高校卒社員		47(41)	36(44)
計		89(73)	78(81)

※()内は昨年度実績。

2. 本日、両社社長は、入社式でそれぞれ訓示を行いました。その要旨は次のとおりです。

・ジャパンエナジー社長 松下功夫

わが国石油業界は、国内石油製品需要の減少、精製能力過剰などの課題を抱え、厳しい経営環境下にあるが、我々には、将来も一次エネルギーの太宗を占める石油を安定的に供給し続けるという大きな社会的使命がある。当社が一翼を担う新日鉱グループと新日本石油グループとの経営統合は、現在の状況を打開し、今後の大きな飛躍を期すものである。エポックメイキングなこの時期に入社する皆さんには次のことをお願いしたい。

1. 変化を先取りし、次代を睨んで仕事に取り組む

時代は常に変化し、その速度は増している。従来の考え方がそのまま通じる時代ではなく、「現状維持」とは「退歩」を意味すると言っても過言ではない。世界の様々な情報に対してアンテナを張り巡らし、変化のベクトルに関して自分なりの見通しを持ちながら、常に創意工夫を怠らず、進取の精神で仕事に取り組んで欲しい。

2. ひたむきに、そして真剣に仕事に取り組む

これからは人生の中で仕事の占める割合が大きくなる。自分の意に沿わない仕事であっても、真摯に取り組んでいくうちに、その重要性や面白さがわかり、達成感や充実感を味わえるようになる。若い頃の苦労は糧となり、将来、必ず役に立つはずである。

3. 「CS」・「CS経営」を真に理解する

当社は、お客様満足(CS)を徹底的に追求することで、競争力の向上を目指している。その活動は地味ではあるが、究極の差別化戦略として必ず競争力向上に繋がると確信している。その重要性を理解いただき、お客様や社会から高い信頼を得られるよう一緒に取り組んで欲しい。

4. よき企業人である前に、よき社会人たれ

市民としての倫理観やコンプライアンスの精神が欠如しては、真に優れた企業人として大成することはできない。自分の仕事が社会のためになっているか、法令に違反していないか、常に自問自答しながら、仕事に取り組んで欲しい。

・日鉱金属社長 岡田昌徳

皆さんは、未曾有の世界同時不況に揺れる歴史的な大時化の中で社会人・企業人としての船出を迎えられたが、皆さんには、これを幾多のチャンスが潜む「またとない絶好の機会でのスタート」として捉え、今後の成長を期して、明るく前向きに努力されることを期待している。

当社としてもこの「危機」をチャンスの到来と捉え、中長期の成長戦略である「自山鉱比率の拡大をベースとする銅事業の国際競争力強化」「下流部門の環境リサイクルおよび電材加工事業の収益力強化」を着実に実現することとしている。また、新日鉱ホールディングスと新日本石油との経営統合は、より大きな財務基盤が構築され、資金調達力を高めること

ができるなど、当社にとっても重要な意味を持っている。

経営統合後の金属事業に対する期待に応え、存在感を示していくためにも足元の事業環境を克服し、将来にわたる成長に向けて全社一丸となって渾身の努力を傾注していかなければならない。

これらの取り組みを現実のものとしていくための原動力は人材であり、変革していく勇気や目標を達成する情熱である。そのためにも皆さんには次の4点を心がけていただき、困難に怯むことなく未来を切り拓く、タフな人材として活躍いただきたい。

1. これから皆さんの生活時間の大部分を会社生活が占めることになる。その中で皆さんの人生をより意義深いものとするべく、自分の仕事に対する価値を見出していきたい。
2. 企業も社会の一員である。社員も高い職業倫理観を持って業務に取り組むことが重要であり、皆さんにも早期にこの重要性を認識していただき、当社のCSR活動の一端を担っていただきたい。
3. 企業は高い専門性を持った多様な個性の集合体であり、その中で醸成されたValueが我々のビジネスの源泉である。Face to Faceで話し合うことを含めて積極的なコミュニケーションを深めて新たなビジネスチャンスを発掘していただきたい。
4. 当社はグローバル・カンパニーとして海外において事業展開を進めており、我々は海外従業員をリードすべき立場にある。語学力は必須であるとともに、相手国の文化・慣習に敬意をもって接し、真の国際感覚を身につけていただきたい。

以上